

寺の法灯を継承し、文祿二年妙顯寺へ晋山するまで蓮昌寺に在住している。この物語は談義本の一種として、妙覺寺門流の教義を广泛宣传することを目的意識として成立したものと考えられる内容（但樂受持大乘經典、乃至不受余經一偈の強調）、文祿四年の日紹の動向が反映されていないことなどから、備前法華の実態にあかるい僧侶の誰かを原作者として考え得る可能性から類推して、成立の下限を文祿二年頃とする方がよいのではないだろうか。

主人公の出身地「備前の中村」を現在の山陽町西仲（通称中村）としているが、これについては確証はなく、また備前に中村と称せられる地名は十数ヶ所存在するのであって、また歴史的事実から物語が創作されとは限らない故に推定する作業自体があまり意味がない。主人公の寺・西正成、正行にしても、西方浄土信仰と楠公父子の説話を加味していることが考えられることから寺西氏の存在を実証しようとすることは無理であろう。

妙正は正直捨方便、妙善は後生善処に由来すると考えられるので、主人公父子の実在とは無関係であり、虚構に於ける技法の一手段と解するのが至当ではなからうか。

主人公妙正父子の忌日を父を九月十八日とし、子を八月十八日とすることは、消極的ながら観音信仰を包摂してい

ることが察知せられる。この件については「選集抄卷七第七下野国刀弥川無相房事」にみられる説話が参考になる。

「堺の薬王寺の住持日りやうと申聖人」について考えてみると刊本によつては日梁とあり堺の経王寺の薬草院日梁（天正十年六月十一日寂）ではないかと考えられるが、確証はない。

謡曲・狂言・道行文からの借用は極めて巧妙であり例が多く、「鳥羽に恋塚、秋の山」は仮名草子 恨の介上に「鳥羽の恋塚、秋の山」と同じであり、人口によく膾炙した名文句が多数引用されているが、この点については、当日配布の五枚の詳細な資料によって大体その全貌を把握できるのでないかと考えている次第である。

方便品十如是について

浦 上 芳 武

旧訳「諸法の実相とは所謂諸法如是相如是性如是体如是力如是作如是因如是縁如是果如是報如是本末究竟等」新訳「諸法は何ぞや云何んぞや何の如きや如何なる相あ

りや如何なる自性ありや」

釈尊當時文字なく、学問の主力は記憶暗誦の口伝であった。自利利他自覚々他令三法久住のための仏大慈悲で仏滅後四回に及ぶ結集會議が開かれたとは法苑珠林の説で、第一は釈尊在世の如き表現、第二は滅後の結集準備、第三は仏滅後で龍樹の智度論説と全同、第四は仏滅百年後の結集長たる大迦葉が百五十歳の長寿であった一事も日本古事記時代の帝寿と対比し異とするに足らず、仏滅後七百年出世の龍樹百二十歳以上の長寿者は今もある。十如是は龍樹の大智度論に論及されているのだから、西紀四〇六年羅什訳は名訳である。

新訳の「何ぞや如何ぞや」は如是体如是作如是力と判じ得る程度で、以下は如是相如是性である。

仏滅九百年無着世親二兄弟出現後程なく印人スリヤソマ三藏に師事した印人羅什が、師命を奉じ、西域亀茲国大臣羅炎の子たる羅什は、隣国姚秦に越境の機を待ちつつ漢語を学ぶ内彼我戰勃発、捕虜の身も賓客の待遇と変わり、勅命を受け、長安の都で法華経始め七十四部三百八十余巻を漢訳した仏典は、羅什訳といっても什個人の悟達から梵文の一節と意味を漢語で述べ、長安屈指の多数文人筆記後互いに繅文を示し、最後羅什の総合印可によって訳文が旧訳の

如く決定した次第で、羅什は繅訳長を務めたのである。

羅什の悟りから出た漢訳文を多数文人が修飾した名漢文は、数字等の誇張は梵文以上であつても不思議はない。不思議といえば、スリヤソマ三藏が、この経東方の小国に縁ありと、愛弟子羅什を摩頂激励したその並々ならぬ念願である。羅什の死は西暦四百十三年だから、四百四年から九年足らずの大事業で、インド人たる語力と大死一番の悟達力、及び屈指の多数文人を集めた国家的事業の賜である。

明治の新訳は五如是に過ぎない理由について、私案であるが、同座の弟子にも聞き洩らし異聞忘却等あつても、文字完成後不完全記録は重宝視されず、説誦されないままにネパールの如き高原乾燥地帯が、保存に適したために二千年百年間保存されていたものと判断すべきであろう。

この十如是はカント哲学の十二の範疇に当るが究竟等のない先天的思惟の形式である。すべて万物万有にそなはる相性体力作因縁果報と究竟等の上に如是があるために十如是となるのである。

新訳法華経は今から約七十年前、インドの東北ヒマラヤ山脈の南側に東西に細長いネパール国で、発見された梵本法華経を大谷大学教授南条博士と、泉教授が和訳された経典である。

一見して明かに、聖徳太子以来伝教大師日蓮聖人われわれ弟子信徒が聖視精読している旧約妙法蓮華經の要品たる方便品十如是実相段に劣り、両教授訳とを對比すれば、上半も重要であるが、更に下半の科学的な因縁果報と科学哲学実践的な最後如是本末究竟等が、ネパール発見の梵本に欠除している現実を知ったわれわれは、羅什の旧約に真価を再確認し、断じて迷はないのである。

諸法実相段の難解な理由原因は「法」の一字を、単に法則規範の如く主観的思考の形式とのみ判断する所にある。われ等は初から天台日蓮兩師の指導によって、諸法を万有と理解し、相を色形、性を物心二体の温度声音意志の有無によって生物と無生物を区別している。天台智者大師は十如是の判釈において、体力作縁は義色心に通ずとあるも、私は「性」をも加え、性体力作縁は色心に通ずと改むべきであると主張する者である。薬物の性状は薬局法に詳記され、固形体も温度の高低によって液体気体の三体に変化する万物流転の科学的仏教真理は水のみに限らない水を電気分解すれば水素と酸素に分離し、イオン化して帯電する。

本末の本は相、末は報、要するに差別の九如是が、究竟終局において平等な気体と心靈の波動には中心があっても平和な状態では何処に中心があるか不明である。

然るに颱風発生は、空氣の回転運動を起こす非常事態となれば、自然その中心に眼という無風に近い静かな箇所を生じて移動する。都もその眼の中に入って、平穩無事な颱風の通過を待った経験は過去の如く将来にもある。

心靈中の個靈に対し人の死後年忌仏事が行はれる風習は我念のない人爲の定めであるから保存されている。

聖人は精神思想の混乱した非常時に出現した中心、颱風の眼であって、無我万徳の持主である。今や古聖人孔子が中国に批判を受けつつあるが、儒教は君主に仕える吏道を説いた教で、仏教の如く王道を説いた教ではない。

羅什や聖徳太子、伝教大師は王師であり、日蓮聖人は王道とその他の人倫を説き、立正安国論以後十一通御書によって、未だ国の大事が起らぬ内に、大蒙古の来襲を予言され、時の政府幕府に対して、邪宗を禁じ迫害に屈せず三度の国諫をされた。後に北条最明寺も法華に帰正したが、日本天皇は国及び国民の代表中で国会開閉院式のほか国事十項のご任務が憲法に定められてある。平等の中にも秩序が定まり、平和が保たれるのである。